

カッコいい生き方と健康

がん社会 を診る

中川 恵一

私の実家は「中川酸素」という小さな会社を営んでいました。家族経営に近く、父が三代目の社長、母は経理を担当していました。

社員数20人ほどで、会社は東京都中央区月島にありました。中川家一家4人（両親と私、3歳下の弟）は会社の建物の2階で暮らしていました。

酸素屋といっても、溶接や医療向けの販売はごく一部で、築地市場の巨大ないけすで高級魚を生かすために使う

酸素を一手に扱っていましたが、独占的ニッチビジネスで、それなりにもうかっていたようですが、私が小学生のころから築地市場の移転が取り沙汰されていました。当時の候補地は豊洲ではなく、大井だったと記憶しています。

月島と築地は目と鼻の先で、現場のトラブルなどにも迅速に対応できました。しかし、魚市場が大井に移転すれば地の利を失います。そもそも近代的な設備を備えた新市

場ができれば、中川酸素のような小さな企業が入り込むニッチはなくなるはずですが。

結局、両親は会社の売却を決断しました。私が酸素屋の社長ではなく、がん治療の専門医になったのは市場の移転問題が背景にあるといえますよ。

幼稚園は築地本願寺付属和光重園幼稚園で、「南無阿弥陀仏」を唱えていました。小学校からは九段の暁星でカトリック教育を受けました。6歳にして「改宗」したわけですが、阿弥陀仏は一神教的色彩があるせいか、あまり違和感を覚えませんでした。

浄土真宗の浄土や往生、キリストの受難や復活といった教えは、必然的に生と死を考えさせます。がん医療の道に進んだ背景には幼少期の宗教体験があったと思います。子供のころはよく、会社の

トラックに乗せられ市場に行ったものでした。仕事が終わると、そのまま同じメンバード居酒屋へ繰り出し、たばこを吸いながら大酒を飲むのがお決まりのパターンでした。健康的な生活など「男らしくない」「カッコ悪い」と口を揃えていたのを覚えていますが。血圧が高いことや肝機能が悪いことなど、むしろ自慢話になっていました。

病気の早期発見どころではありませんから、がんや脳卒中で亡くなった社員は1人や2人ではありませんでした。父には弟が3人いましたが、うち2人ががんに罹患（り）かんし、1人が若くして亡くなっています。

当時、定年は55歳でしたが、今や70歳になろうとしていますが。健康を意識し、がんを避けながら、長く働ける体を保つこと。これは自分と家族を大切にし、社会に貢献するステキな生き方。最高に「カッコイイ」と私は思います。

（東京大学特任教授）



イラスト 中村 久美